

清水ヶ丘の風

ハルモニーコール楽事通信第26号

2016年11月5日

Barrabam か、Barrabasか、それとも Barabbas か

(バラバの表記と人物について)

楽事通信第24号にアルトの榎本様からの貴重な体験談が掲載されたが、その裏面にはシュッツとフンケ作曲の「バラバ！」の譜面とともにバッハの関連箇所が比較として載せられている。これは私達が現在使用しているベーレンライター「マタイ」のヴォーカルスコア(BA5038-90)198頁(第45a曲の合唱部分)のコピーであるが、ここには誤植がある。

すなわちバラバの綴りがこの譜面では Ba-ra-bam! となっているが、これは Bar-ra-bam! の誤りである。それは同じヴォーカルスコアの196頁の第3段の譜面(福音史家による聖句部分)に Bar-ra-bam と表記されていることから明らかで、問題の箇所では Ba の次の r を削除すべき理由はない。この点を確認するべくベーレンライターの総譜およびミニチュア・スコアを見たら当該箇所は正しく Bar-ra-bam! となっているし、自筆譜の写真でも筆記体の r が rr と2つ重なっているように見える。なおヴォーカルスコアの196頁の第2段冒頭に Bar-ra-bas の表記があるが、これはドイツ語の文法により1格(主語)を示す s が語尾に用いられているからであり、これに対して Bar-ra-bam では4格(目的語)を示すため語尾には m が用いられている。イエスのドイツ語表記が Jesus(1格)と Jesum(4格)で相違しているのと同様である。

なぜこんな細かいことを持ち出すのかと言うと、Bar- のように r があるかどうかでこの箇所の歌い方に相違がでてくるからである。いくつかの「マタイ」のCDではこの r を強い巻舌でカタカナにすれば「バルララバム」と絶叫して群衆がイエスを処刑に追い込むことを強調している。この箇所は「マタイ」の合唱曲の中でも重要な場面の一つであり、このような譜面上のミスは許されないと思うのだが、ベーレンライターのヴォーカルスコアにはほかにも結構誤植があることに注意すべきである。

ところで更に細かいことだが、同じヴォーカルスコアの197頁の最下段には um Bar-ra-bas とある。ドイツ語の前置詞の um は4格支配なのでこれまた um Bar-ra-bamの誤植ではないかと調べたら、旧バッハ全集のスコアではこの部分は確かに um Bar-ra-bam となっていた。しかし新バッハ全集のスコアでは上記のように um Bar-ra-bas となっている。手持ちの20枚近くの「マタイ」のCDで当該箇所を聴いてみたら、昔の旧バッハ全集によるCDでは um Barrabam、最近のCDでは um Barrabasが圧倒的だったが、CDのリーフレットの歌詞と実際に歌っている歌詞とが違っていたものもいくつかあった。

この謎を解くためバッハが「マタイ」に使用したルターのドイツ語訳聖書の1545年版に当たってみたら vmb Barrabas(vmbはumの旧字)となっており、Barrabamではなかった。ルター聖書はルター自身により何回も改稿されており、バッハがどの版を使用したかははっきりしてないが、新バッハ全集ではバッハの自筆譜の分析により Bar-ra-bas を採用したのであろう。なおルター聖書はドイツ語の基礎となっているものだが、500年前の文章は当然ながら現代ドイツ語とは相違があり、教科書として使用するためルターの死後何回も改訂を重ね、内容的にも学問的な校訂がなされた結果のせいも、筆者が持っている1984年の改訂版で

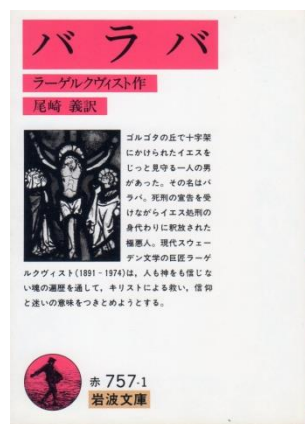
はバラバの表記はすべて語尾変化のないBarabbas (Barrabas ではない)で統一されている。

ちなみに Barabbas はバラバのギリシャ語表記をラテン文字に転写したもので、息子を意味する bar と父を意味する abbas から成り、「ある父の息子」の意味だそう(ウィキペディアなどによる)。しかもバラバは新共同訳のマタイ福音書第27章16-17節にあるように「バラバ・イエス」が本名であり、「どちらを釈放してほしいのか。バラバ・イエスか。それともメシア(注:「油を塗られた者=救世主」、英語読み=メサイア、ギリシャ語ではキリスト=キリスト)といわれるイエスか。」とピラトは群衆に問うのである。イエスという名前はマリアと同じく当時は極めて平凡な名前であり、ヨハネ受難曲の冒頭の合唱曲にでてくるように「ナザレのイエス」と地名をつけて区別しなければ特定できなかつたのである。

さてバラバの罪状は福音書によって異なっているが、暴動時の人殺し(マルコ・ルカ)、強盗(ヨハネ)、あるいは評判の囚人(マタイ)と云われている極悪人で、死刑の判決を受けていた。イエスの代わりに恩赦を受け、釈放されたバラバはその後どういう運命を辿ったのか。



イエスの代わりに恩赦を受けたバラバ(ウィキペディアより)



岩波文庫「バラバ」の表紙

我が村上春樹は今年も逸したが、スウェーデンの作家ラーゲルクヴィスト(1891-1974)は釈放後のバラバを小説にして1951年度のノーベル文学賞を授与された。この小説は165頁の中編で岩波文庫から出版されていたが、さすがに本屋で探してもなくアマゾンで入手して読んでみたら意外と読みやすく内容的にも面白かった。もちろん小説はあくまでも作家の創作であり史実とは異なるが、釈放後のバラバがゴルゴダの丘で十字架上のイエスをじっと見守り、翌々日には墓が開いているのを目撃し、心を動かされながらも山賊生活に戻り、その後ローマ人の奴隷になって生き地獄にあえぎ、そこでキリスト信者と友情を結び、最後はキリスト教徒迫害の犠牲になって本当に磔刑されるまでの物語である。「人も神をも信じない魂の遍歴を通して、キリストによる救い、信仰と迷いとの意味をつきとめようとする」と本の帯に書いてあるが、神(キリスト)を信じようとしても信ずることのできない、それでも信仰を求める近代人の悩みを描く傑作である。

バッハは「マタイ」においてたった一度だけ3つの音符でしかも不協和音で合唱に Bar-ra-bam! と叫ばせる。ここには通奏低音のほかはオケの伴奏もない。「ヨハネ」の第18b曲ではオケつきで「この男ではなく、バラバを」と3回も叫ばせるのは大違いである。この「バラバ」と叫ぶ群衆の中に私自身が居ると感じている人も多い。うっかりすると音程も定かでなくあつという間に過ぎてしまうこの合唱曲をうまく歌いこなせるようになりたいものである。

【後記】「マタイ」の音楽的構造について正面から分析し論じるのは新井楽事委員に任せ、私の方は「マタイ」を歌っていて気に掛かったことを落穂拾い的に取り上げていきたいと思っています。(山田)